

# Newsletter

January 2026

<http://www.aack.info>

## 目次

ナムナニ 40 周年特集	ナムナニ隊概要	横山宏太郎.....10
世代を越えて夢を繋ぐ 和田 豊司.....1	北大・京大交流会	
ナムナニ偵察とカイラス巡礼 斎藤 清明.....2	北海道大学山岳部・山の会との交流事業について 幸島 司郎.....13	
まだ終わらないナムナニの学術調査 西山 孝.....4	飲んで食べ、歌って笑った北大・京大交流会 榊原 雅晴.....14	
ナムナニを思う 松林 公蔵.....7	事務局だより.....16	
ナムナニ 40 年ー Y さんへのお別れの言葉 伊藤 宏範.....8	会員動向.....16	
ナムナニ断片抄 山田 和人.....10	編集後記.....16	

## ナムナニ 40 周年特集

### 世代を越えて夢を繋ぐ

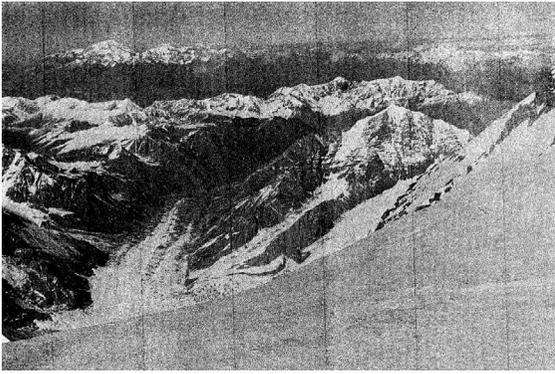
和田豊司（同志社大学山岳会）

ナムナニ峰は当時地理的に未知で未踏の登山家にとって血潮を湧き立てる存在であった。1964年に入学した小生は1960年の西ネパールアピ（7132m）、1963年のサイパル（7031m）の遠征隊が部室に残した食品を下宿生活の糧にして山岳部現役時代を送った。鈴鹿や穂高しか知らない1年生の小生の前でヒマラヤ、アンデス、アラスカの山々の名前が飛び交う。8000m峰がすべて登頂され次に目指すのは未知・未踏の山かより困難なルートからの挑戦か地理上の未知の探検かなど先輩諸氏が口角泡を飛ばして議論していた。その中で平林氏を中心としたヒマラヤ経験者から「グルラマンダータ（ナムナニ峰）」という7800m程の未知・未踏の山の話が出ては消え、また出ては消えていた。

サイパルからの遠望、不明瞭な旅行記の写真しかない当時である。チベットはドライ・ラマの亡命、文化大革命を経て登山隊を受け入れる素地もなく西チベットへ入域することもできず情報もなかった。夢を語り継ぐのみであった。

1960年代後半、同志社大学山岳会（以下DACと略す）としては国境線近くのネパールヒマラヤ登山禁止時期でもありアラスカやアンデス・アマゾンに関心を向けていたが登山禁止が解けそうになると西ネパールの最高峰ダウラギリ（8167m）に偵察を出し1970年ポストモンズーンに登頂した。

文化大革命の嵐が去り（1977年）日中友好ムードが高まり始め、中国の未踏峰への関心が高まってきた。あらゆる伝を使い1981年「四



写真は62年前サイバル頂上付近からみたナムナニ峰

姑娘山(6250m)」に初登頂し、すぐその次の計画として「グルマンダータ」への模索が始まった。当初、DAC 独自で中国登山協会と接触していたが同協会との交渉の中で京都大学学士山岳会(以下 AACK と略す)、中国登山協会3者での合同登山とすることで計画が成立した。日中友好の流れに乗り両国の政治家も巻き込んだ遠征となった。DAC はアピ、サイバルの主演でグルマンダータに一方ならぬ思い入れのある平林氏が渉外の前面に立ち準備が進んだ。

登山中の出来事や記録的なことは報告書が出されているのでここでは記さないが2、3の印象に残った出来事は第2次登頂のさなか高所障

害で倒れた角谷隊員の救出劇である。特に史占春総隊長の非常時(角谷隊員の救出劇)のリーダーシップに感銘を受けた。強力な中国隊員や松林医師などを叱咤激励しながら指揮しベースキャンプに迅速に降ろし一命をとりとめた。40年を経た今でもその時の様子が目に浮かぶ。

この隊は今となって振り返ると日中友好の盛り上がりで絶頂期に中国登山協会・AACK・DACの3者の最高の隊員・スタッフが結集し上手くハーモニーを取りながら成功させた最後の巨大登山隊であったと振り返っている。異質の環境で育った3者がお互いの長所を生かし尊重することでナムナニ峰登山を成功させた意義は大きかった。その後梅里雪山で有能なナムナニ峰登山隊員が遭難してしまったことは残念ではない。

DACはその後も西チベット、極西ネパールヒマラヤにある未踏・未知の山々に魅せられ2002年カキユカンリ、2007年クビカンリ、2010年チャンラ、2015年アイチェンなどに初登頂、2023年にはサイバルの南にあるラマ峰にも足を伸ばし今日に至っている。60余年経った今もインダス、ガンジス(ブラマプトラ)、サトレジ、カルナリ源流域の山々に連綿として登山活動が続けられている。

## ナムナニ偵察とカイラス巡礼

斎藤清明

今年がナムナニ登頂40年ですが、私が参加したのは、その日中友好ナムナニ峰合同登山隊の本隊ではなくて、前年1984年の先遣隊でした。日本がわの井上治郎副隊長ら5隊員のほかに報道班があり、毎日放送の3人と共に行きました(山岳部同期のジローとの最後の山行になりました)。

ナムナニ隊は、AACKとDAC(同志社大学山岳会)の共同のうえに、初の日中合同隊という大がかりなもので、隊が成立するまでのさまざま入り組んだ経緯なども垣間見えますが、それには触れないでおきます。同隊は翌85年に当時未踏峰として世界第2の高峰ナムナニ(7694m)に初登頂します。私にとっては本隊よりも先に行って、カイラスやマナサロワール湖という聖地に1番乗りできるのがうれし

た。カイラスの巡礼を(インドからの巡礼者以外で)外国人に対して初めて許可を与えたと中国登山協会はいっていました。

### ○カイラス

インドとネパール国境近くのチベット自治区の西端にあるカイラス(カン・リンポチェ 6656m)は、チベット仏教と土着のボン教、それにヒンズー教でも聖山とあがめられています。また湖は、ガンジスやインダスなど南アジアの大河が流れ出すといわれ、ヒンズー教徒にとっては水浴すれば全ての罪業が許されるというありがたいところ。しかも、この地を日本人が訪れた記録は、1900年にネパールから密入国した僧・河口慧海と、1927年にインドから入った写真家・長谷川伝次郎の2人だけ。

外国人でもスウェーデンの大探検家スウェン・ヘディンが第3次中央アジア探検（1905～8）で入域し、大河の水源を調査した報告書ぐらいいしか見つかりません（ヘディンはこの探検の帰路、日本に立ち寄って東京と京都で講演。その際に世話をした西本願寺の高僧が知人の父親でした。その際にヘディンからもらった名刺を、知人が私に譲ってくれ、大切にしています）。

そんな秘境が、私と毎日放送の取材班に開かれた。しかも、そこに至るキャラバンルートは、新疆ウイグル自治区とチベット（西藏）自治区を結ぶ「新蔵公路」でした。ヘディン隊のルートとも重なっていて、それ以後に外国人が通るのは初めてだといわれました。

なお、カイラスの周辺には私たちの直後にNHKやTBSも取材に入り、やがて一般のツアーにも開放されていきました。

## ○新蔵公路

さて、1984年4月から5月にかけてチベット自治区西端へ、新疆ウイグル自治区のカシュガルから崑崙（コンロン）を越えて、イスラム教圏からチベット仏教の聖地に入りました。

まず北京から空路、ウルムチを経てカシュガルに着いた。4月14日、ランドクルーザーで出発。タクラマカン砂漠では砂嵐にも遭った。葉城からは崑崙（コンロン）山脈へ。まずアカズ峠（3200m）、その次にはセラク峠（4850m）、そして界山大坂（5240m）の高所を経て、チベット自治区に入った。高度順化のために1日走って翌日は休みながら、約2000kmを2週間かかった。宿場など人家がほとんどなく、人民解放軍の兵舎に泊めてもらいながら行った。

憧れの聖地に着くと、マナサロワール湖は、一面に張っていた水が溶け始めたばかり。神秘的だった。おもわず、両手にすくって飲んだ。インド側からヒマラヤの谷間を通ってくるヒンズー教徒の巡礼は2年前に認められたというが、今シーズンはまだ来ていない。チベット人の巡礼者はすでに姿を見せ、東部のカム地方から何カ月も歩いてきたという男たちは、湖岸から見えるカイラスに向っていった。

## ○巡礼

先遣隊がナムナニの登路を探っている間、私たち報道班は、案内人を雇い、ヤクにテントや

食料の荷を担がせ、カイラスを巡礼した。標高5000m前後の山道約50kmを歩いての1周。84年前に河口慧海は「天然の曼陀羅」と称して4日間かけて廻っている。慧海は僧院に泊まりながらだったが、それらの施設はすべて文化大革命の際に破壊され、瓦礫になっていた。私たちも4日間かかったが、2日間で廻るのが普通のチベット人巡礼者に次々に抜かれた。しかも、彼らは何周もする。仏教徒とヒンズー教徒は右回りだが、チベット土着のボン教は左回りなので、毎日のようにすれ違った。顔なじみになったボン教徒から「日本人は仏教徒か。それにしては遅いな」と笑われた。

巡礼者は老若男女さまざまだが、数珠を手に、「オンマニペメフム（意味は「ハスの中の宝石よ」）と祈りの言葉をとなえながら、ひたすら歩く。彼らは各地からカイラスの麓に来るまでの間も歩いて来るそうだ。私たちはランドクルーザーで麓まで乗りつけたのだが、それでも巡礼路を歩いているうち、不思議な感覚にとらわれてきた。自然に溶け込んでいくような気になった。

吐く息が荒く、足が棒のようになっても、歩いているうちは心が静まり、雑念が消えて、覚めていくようだった。やがて、私もいつのまにか「オンマニペメフム」を唱えていた。

## ○カシュガル

先遣隊とともに往路を引き返し、カシュガルに戻ると、もう5月末になっていた。荒涼たるチベットとちがう、初夏の爽やかさ。ポプラは芽を吹き、水路には豊かな流れ、畑は緑の絨毯のようだ。ハミ瓜やブドウがおいしかった。

かつてのシルクロードの要衝カシュガルは、この年2月に準開放都市として外国人旅行者に開かれたばかり。人口23万のうち7割がウイグル族という、まさに西域のイスラムの町。モスクには何千人もの信者が集い、バザールも大賑わい。金細工や家具、木工、鍛冶屋などさまざまな職人たち。ロバの荷車や自転車が行きかい、活気にあふれていた。

（33年後の2017年、パキスタンから車でクンジュラブ峠を越えて再訪し、驚いた。警察官が至るところで見張っている、中国の町になっていた）

---

## まだ終わらないナムナニの学術調査

西山 孝

---

1985年日中友好納木那尼峰合同登山隊がナムナニ峰の初登頂に成功しました。両国政府がかかわった大遠征隊で日中合わせて13人が頂上にたちました。当時を振り返ってみますと、ナムナニ峰は、グルラマンダータともよばれ、戦前から多くの登山家の注目を集めるチベット高原の奥深くに聳える山で、AACKだけでなく他の登山団体も登頂をねらっていた高峰です。同隊の目的はもちろんナムナニ峰の初登頂にあります。もう一つの魅力は隊がおとるルートにありました。キャラバンは、タクラマカン砂漠最西端の町カシュガルから始まり南下して玉(ヒスイ)の町で知られるホータンへの道を横切り天山山脈を越えてカイラス、そしてナムナニ登山、帰路には隊の一部がインダス川—ブラマプートラ川からラサにいたるものでした。チベット高原の西から南をグルッととりまき、国境近くにあたります。長く旅行や調査が固く閉ざされていたところ。まさに秘境でした。そこで、当然のこととして、納木那尼峰合同登山隊の活動目的にも学術調査が加えられました。登攀は、頂上を直前にしながら高山病などで登頂できなかった隊員もでしたが、日中隊員間の連携もうまくすすみ、成功裏に終わりました。学術班も予定された地域の調査を無事終えました。日中友好隊というのはしばしば見かけられますが、日本側は同志社大山岳会と京大士山学会の珍しい組み合わせでした。しかし、日中また私立大学と国立大学との間には大きなトラブルは起こりませんでした。遠征隊の活動記録は中国語、日本語、英語の3冊の報告書にまとめられています。学術成果は3年後に京大会館で開催された日中合同チベット高原学術調査討論会で発表され、2冊のプロシーディングス(英語)にまとめられました。公式の流れはこのようなものだったと思います。私は学術隊員として、地質、地球化学担当で参加しました。ブラマプートラ川からラサに抜ける班にも参加が許されました。貴重な学術価値の高いフィールドを目のまえにして岩石や水に試料採取に奔走しました。犬に囲まれ動けなく

なったり、縄でできた橋をジープで渡ったりと危ないこともいくつかありました。持ち帰りました資料は、タクラマカン砂漠とチベット高原の地磁気の測定や陸水の化学分析を行い、結果をそれぞれ学会誌に発表しております。ユーラシア大陸とインド大陸が衝突したときのすがたがあきらかになりました。これで私のナムナニ隊の仕事は区切りがつかしました。しかし、手元には多数の岩石資料と写真(カンベンチン隊を含むと1万枚ぐらい)が多量にあり、引き受け手のないまま残っていました。めったに入ることが許されない場所での貴重な資料ですから何とか保存し、必要となるときにつかえる状態で後世に残したいと考えておりました。しかし、時間もお金もなく、とりあえず石灰石鉱山(大垣にある会社)に保管してもらっていました。その後も齋藤副総隊長とは毎月のように診てもらっておりました診療所でたびたびこの件で相談しました。齋藤ドクター(Yさん)とののはなしは概略つぎのようなものです。ヒマラヤの山岳氷河がそろって急速に減衰していることはよく知られ、地球温暖化ガスの増大が原因とされています。これは古い記録写真と現在の氷河の位置を照合すると、現在の氷河の後退がハッキリわかるからです。この地球規模の気候変動はヒマラヤ氷河に限ったことではない。チベット高原でもタクラマカン砂漠でも同じように起こっているはず。タクラマカン砂漠が大きくなったりあるいは小さくなったり、チベット高原の牧草地が移動したり消失したりしていることも考えられます。さらに、現在の地球は活動期にはいって、ミャンマー、ネパール、トルコなどで巨大地震が頻繁に起こっています。新しい河岸段丘の誕生など、上昇するヒマラヤの片鱗があらわれているかもしれません。今日のように衛星画像の鮮明でなかった40年前のカシュガル、ナムナニ、ラサにいたる写真は貴重な存在になっています。この3月に齋藤先生から「未踏峰と三江併流」(中村保著、ナカニシヤ出版)を君にやるから取りに来るよにと電話がありました。今では形見となってしまいました、

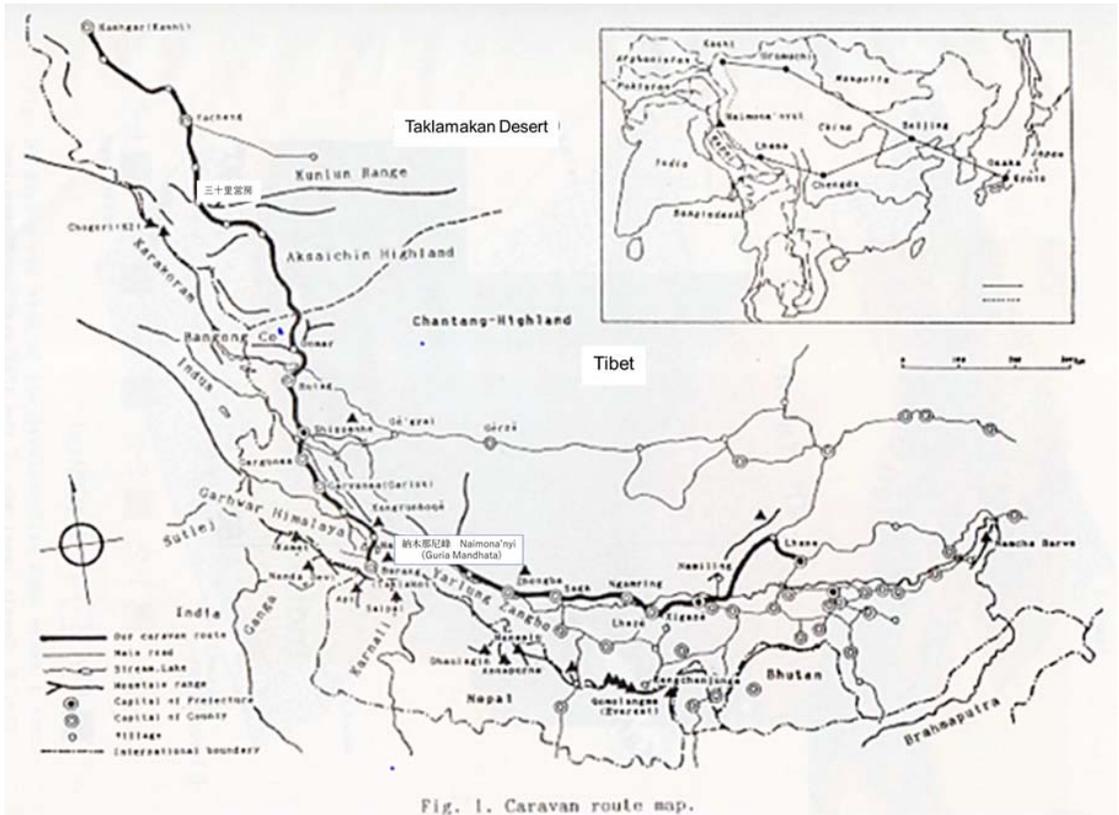


図1 ナムナニ登山隊学術班調査ルート図 (1)



図2 ナムナニ登山隊学術班調査ルート図 (2)

ナムナニ隊でも中村さんのような写真集の出版を考えてはどうかということだと思います。

さて、大垣にあずけていた岩石と写真資料のその後ですが、動き出したのは2019年です。在職中に7大大陸から集めました鉱石資料とともにナムナニやカンペンチンの岩石標本も京大総合博物館に目録をつけて収納しました。しかし、写真はネガフィルムのままマウントにはいったままになっています。電子データに替え、簡単な注釈をそえた目録を作成し京大博物館に収録してもらえる形に手直しをつづけております。世界のどこからでもアクセスできるようにする予定です。高井山岳部長が京大総合博物館長在職中になんとかこのプロジェクトを実現し

たいと願っています。齋藤副総隊長からの重い宿題を、良いかたちで残したいと思っています。



写真1 40年近く迷ってようやく京大総合博物館に収蔵が決まったナムナニの写真資源（ネガフィルムから電子データへ変換中です）



写真2 ベースキャンプ付近にみられるインド大陸とユーラシア大陸の衝突による衝上断層



写真3 上昇するヒマラヤ（マナサロワル湖から流れるブラマプトラ川の河岸段丘）



写真4 聖山カイラス



写真5 アリ地区の砂漠と低山

# ナムナニを思う

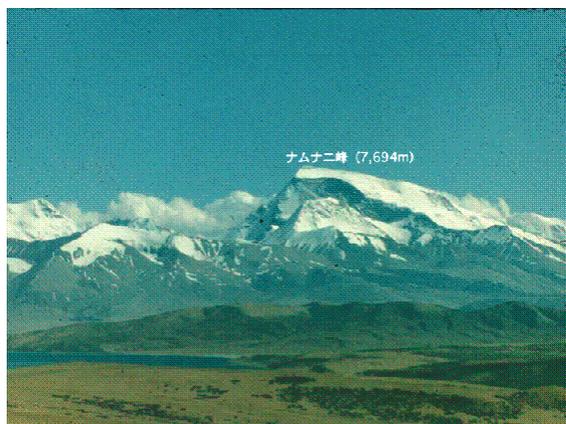
松林公蔵

はじめに

1985年は、私の個人的な登山史にとって画期的な年となった。1979年に関西学院大学のシアピークという山に、初めてのヒマラヤ遠征として参加したが、登頂をはたすことはできなかった。1982年にカンペンチン初登頂者になることができた。この間、私は、京大医学部神経内科の医員として勤務していた。当時の京大神経内科の亀山正邦教授は、山登りは健康にまらねといった感じで、登山には寛容だった。院生同僚は、皆、毎日実験室で試験管をふる生活に邁進しているのに、私だけは山登りに集中していて、多少のうしろめたさがあった。そこに山岳部・AACKからきた指令が、春はナムナニ、秋はマサコンに参加せよというものがあった。私は多少迷ったが、登山を優先することにした。

ナムナニ

湖面標高4千メートルのmana sarowal湖をなかにはさんで、カイラス山と対峙するかたちでナムナニ峰(7694m)が聳えている。インド名グルラ・マンダータ、その秀麗な山容は、おそらく過去数百年のあいだ、歴史に名をとどめぬおびただしい数の巡礼者たちの目を魅めたことであろう(写真)。20世紀になって、この付近に分け入った探検家たちは競ってその存在を記録に残している。



遠く北京から、新疆ウイグル自治区、タクラマカン砂漠を越え、シルクロードの最果ての街カシュガルに達し、さらにまた南下すること1000キロ、崑崙山脈、アクサイチン高原を経てようやくこの聖域に私たちは入った。遠い僻地に巡礼する異郷の老若男女の姿とともに、私たちはここまで旅してきた。そして、久しく人間を拒み続けてきたナムナニ峰の頂きに、私は、人類として初めて足跡を残す幸運にも恵まれた。僧河口慧海が、日本人として初めてナムナニ峰を仰ぎみてから85年後に、私たち日中合同ナムナニ峰遠征隊が初登頂を果たした日、1985年5月26日のことである。

日中友好納木那尼(ナムナニ)峰合同登山隊

ナムナニ峰は、グルラマンダータとして知られ、多くの岳人の垂涎のまどであった。チベット高原南西端、世界の屋根の最奥に位置するナムナニ峰は、今世紀初頭に2組の外国人が挑戦、敗退している。京都では、AACKと同志社大学山岳会がナムナニに登山を申請していた。許可を出す中国登山協会では、同志社と京大を選別することが困難との判断で、最終的に、中国登山協会・同志社大学・京大の合同で、中国登山協会の会長・史占春が総隊長、京大の齋藤博生が副総隊長、同志社の平林克敏氏が登山隊長として、登山が行われることになった。3隊の合同であるので、登頂隊員の決定に関しては、平林登山隊長はご苦労されたものと思われる。

第1次アタック隊は、中国登山協会4名、同志社2名、京大2名の構成で、無事初登頂に成功した。第2次隊が最終キャンプに宿泊し、出発の朝、1名の隊員が、体調を崩したという連絡が、ベースキャンプに届いた。第1次隊として、登頂を終えてベースキャンプに帰っていた私は、早朝のトランシーバー交信に目覚めて、テントをでて、第2次アタック隊員の不調を知った。史占春総隊長は、中国の第2次隊員たちにむけて、「あなたがたは共産党員です。私は、あなたがたに党の品性を発揮することを求めたい。中日両国人民の友誼のために、みなを組織

して病人を安全におろさなければなりません。中国隊員、日本隊員、皆にはっきりと話してください。登頂することも救出することも、ともに貢献することです。私は、救出に力を尽くすことは、登頂に匹敵する、そう位置づけています。もしも今、違った個人の感情から出発して考える者がいるとしたらそれはまったくの誤りです。勝利は全体の勝利であり、だれか個人の勝利ではありません。大局をみて、まずあなたがたがしっかりしてください」。

齋藤 Y さんは、私を呼び、「君は医師だから、ただちに救出に向かいなさい」と命じられた。前日に第 1 次登頂を終えてベースキャンプにもどっていた私と同志社の吹田がただちに、上部に向かい、第 1 キャンプをこえて第 2 キャンプのまえで、寝袋にくるまれザイルで引かれた高山病隊員と出会い、ただちに診察した。肺に雑音は聞かれたが、意識は回復傾向で、少なくとも、もう 500 メートル下ろせば救命可能と私は判断した。第 2 次登頂を諦めて高山病隊員を下降させた 2 名の日本人隊員と 2 名の中国側隊員が診察する私のまわりを囲んでいた。その日は、第 1 キャンプに 1 泊して、翌日ベースキャ

ンプに戻った際、齋藤 Y 先生は、両眼から流れる涙をぬぐおうともせず嗚咽していた。

ナムナニでは、多少の医学調査もできた。これが、私のその後の「フィールド医学」創設に契機となった。それが、1990 年のシシヤパンマ医学調査につながってゆく。ナムナニは、私の研究原点をきめることになった。

その秋、京大山岳部が主体となるブータンのマサコンにも登頂させてもらった。

その後、AACK は、梅里雪山で遭難を起こすことになるが、ナムナニ・マサコンの初登頂は、AACK・京大山岳部の優れた業績であるばかりではなく、私個人にとっては「フィールド医学」を創始する契機となった。現在では、東南アジア研のフィールド医学は、坂本准教授が継承している。

おわりに

「フィールド医学」は、最初、高知医科大学の学生クラブから始まったが、現在では、京大の 1 部局となることができた。これも、ナムナニ・マサコンの貢献が大きい。

---

## ナムナニ 40 年－ Y さんへのお別れの言葉

伊藤宏範

---

齋藤惇生さん、京大山岳会のなかでは、ずっと Y さんと呼んでいます。

Y さんと初めて海外登山に行ったのは、1985 年日中友好ナムナニ峰合同登山隊でした。その前年、隊員に選ばれたとき、会社勤めでしたので、所属する新聞社校閲部の部長は、山のことを全然知らず、心配なものですから、日本側の隊長である Y さんに話を聞くべく、新河端病院の院長室で会うことになりました。Y さんは登山隊の意義、京大の位置づけ、ぼくの隊員たる役割を例の調子で説明していました。部長は Y さんの話がよくわかったのか、ぼくに 3 か月の休職願いを提出するようにはいりました。会社の先輩がその休職願いを原文がほとんど残らないくらいに直してだしたところ、無事休職扱いになりました。その報告に Y さんは、「ほう、そうかね」と喜んでくれました。4 月初めまで

準備に追われて、大阪空港を出発してようやく人心地がつかしました。20 日かけて大本営に到着。連日の宴会と後半のチベット高原でのキャラバンがきつく、病人続出。ドクターである Y さんとマーボー（松林公蔵）さんはフル回転の日々。ぼくも大本営に着きはしたものの頭痛のため、先のキャンプには行かせてもらえず大本営で休養命令。でも食糧庫に置いてあるビールを学術隊員と飲んでいると、Y さんから「酒はあかん」としかられました。最初で最後の Y さんのきつい言葉でした。荷上げに参加できるようになりましたが、この遅れは後まで響き、初登頂成功後に計画された 2 次隊、翌日の 3 次隊にかろうじて入ったものの 2 次隊メンバーの一人が突然高山病で倒れ、高度を下げないと危ないということで、史占春総隊長の中国語と Y さんの日本語の指令がトランシーバーから流

れ、中国人の一部は登頂のため前進、残りの中国人と日本人全員は大本営を目指し下山することになりました。総隊長の中国語は前進部隊と下山部隊両方に納得させるために激励口調、一方Yさんの日本語はドクターとしての診断と処方であまりとわかりやすく、冷静に落ち着いての行動を促すいつものような口調でした。その甲斐あって下山、無事回復。大本営ではYさんは涙を流して喜んでいました。

帰りには、ナムナニの向かいにそびえる聖なる山カイラスを歩いて2日間で回りました。Yさんも初登頂に成功し、みなが無事を喜んで元気に歩いていました。帰途の各地での宴会も苦にならず、極めて上機嫌で北京まで帰り、Yさ

んの話に時々出てくる祇園のお茶屋さんに連れてってくださーいという後輩たちの願いも安請け合いました。

それから40年間、崑崙のこと、梅里雪山の遭難のこと、比叡山のこと、公認会計士のこと、キリマンジャロのこと、近江作のこと、ぼくの人生で大事なときには齋藤診療所で患者になって、Yさんが話を聞いてくれました。これからは「ほう、そうかね」と言うYさんは、困ったときには、たぶんどこかで言ってくれるだろうと期待しています。

Yさん、ありがとうございました。また、会いましょう。



写真 1. ベースハウス（大本営）4700mの北へかなり移動してナムナニが良く見えるところから撮ったナムナニ北面。中央台形状の山の左最高部が頂上7694m（1985年4月30日）



写真 2. ベースキャンプ5600m（4月29日設営）からナムナニを仰ぐ。頂上は奥で見えない（1985年5月10日）



写真 3. C1（6170m）（1985年5月15日）



写真 4. C1-C2間から北にあるカンリンボチェ（カイラス）6656mを見る。手前はランガクツォ（ラカスタール、湖）（1985年5月18日）



写真 5. 前日第1次隊初登頂。第3次隊 C2 (6720m) を出て C3 (7260m) を目指す (第2次隊は C2→C4) (1985年5月27日)



写真 6. C4 (7420m) で高山病になった角谷隊員を C2 まで下ろし松林隊員の診察で無事を確認。この後、C1 まで下山 (1985年5月28日)



写真 7. 聖山カンリンポチェ北面 (1985年6月13日)



写真 8. カンリンポチェを五体投地礼で回るチベット仏教徒たち (1985年6月14日)

---

## ナムナニ断片抄

山田和人

---

原稿依頼を受けた折に、ナムナニは DAC (同志社) との合同登山隊だったが AACK の隊員は、ワイさん・ゴローさん・ジローさん・佐々木さん・ジュンペーさん・ゲロベーさんが亡くなってしまい残りは僅かということを知り改められ、少し暗い気持ちになりました。ナムナニは僕の青春の山ですが、今から 40 年前のことを時系列に正確に思い出すことは 66 歳になった僕には最早難しいので、自分自身の振り返りと遠征中で印象に残っていることを断片的に綴りたいと思います。

1980 年代に AACK はカンペンチンを皮切りにナムナニ・マサコンと中国チベットブータン遠征を立て続けに出して成功を取っています。そんなチベット熱気に包まれた中、大学院 1 回生だった僕にナムナニに参加しないかと声をか

けてくれたのはゴローさんでした。大学 2 回生の時に剣岳赤谷尾根で遭難事故を起こしている僕はその後も積雪期山行を続けていたものの、どこかに雪山と雪崩に対する恐怖心が遺っており即答は保留したままでした。剣岳の遭難で一緒だったハイガさんはマサコンの準備に忙しい中でしたが、やはり僕の背を押してくれました。剣岳で亡くなった 2 人のためにも二度とないチャンスを掴むべきだ、と。

1984 年の春に AACK2 名 (ジロー・ポール)・DAC2 名 (吹田・角谷) の隊員から成る偵察隊が出ることになりました。他には事務局長 (佐々木)、そして当然のことながら中国登山協会 (CMA) メンバー (劉・曾・趙)。出発準備の打合せを DAC メンバーと重ねる中で僕が食糧計画案を説明した時に野菜類のことを「オヤ

サイ」と言うのを透かさず捉えてお前のことは今後はオヤサイと呼ぶ、と同志社綽名がついてしまいました。DAC メンバーは綽名で呼び合う人はいないのですが、何故かそのようになり、今でも DAC からオヤサイと呼ばれます。親しくしている和田さん・宮崎さんはポールと呼んでくれますが、この偵察隊は少人数でしたが、合同登山を円滑に進めるための絶好のアクティビティでした。AACK、DAC、CMA が一緒に登山する相手のことを実クライマーとして深く知ろうと懸命の努力をしていました。僕も拙い中国語を使ってできるだけコミュニケーションを図り、DAC とは山の見方・ルートのお考え方・テント習慣などを共有していきました。

本隊は、1985 年の春に大阪空港を出て北京・ウルムチ・カシュガル、そこからは自動車キャラバンで 4000～5000m の峠を 3 週間かけて越えていく旅が続きます。NHK シルクロードというドキュメンタリー番組を高校生の時に地図と照らし合わせ興奮しながら視ていた僕は、カシュガルの町、そして新蔵公路に向かう風景が TV で見ていたそのものであることにいたく感動していました。1 回生の時に流行っていた異邦人（久保田早紀）の曲が頭の中をグルグルグルグル。同行取材の MBS（毎日放送）の TV カメラは NHK 以来のことだったようです。

キャラバン中に僕は高山病にやられ、人民解放軍の宿舎でワイさん・マーボーさんから点滴治療を受けることになりましたが、早期に高山病をしていたお陰かその後のキャラバンでは体調を崩すことなく 4000m 台のベースハウス（BH）に到着することができました。ここから 5000m 台のベースキャンプ（BC）はヤクによる荷揚げ、そして BC からは日中登山隊員による荷揚げ・キャンプ建設と進んでいきました。C2 から C3 予定地へはそれまでの岩を縫うように進むルートと違って少し傾斜の強い尾根を登っていきます。眺望が一気に開けるルートです。そのルート工作を DAC 宮崎さんと僕で任せ、ステップ作成・フィックス工作等をおこなうのですが、高所の空気が薄い中での活動であることを忘れるほど気分良く進めていきました。もうこの高さには鳥類も上がってきません。休憩時には人類で初めてこの景色を見たのだという高揚感に浸っていました。

C3 建設が済み、日本製アルファ米をお湯で

戻して食べた時にその不味さに辟易した僕は次回荷揚げで荷揚げ計画になかった小型圧力鍋を頑張って持ち上げました。それで炊いたアルファ米の美味しかったこと！C3 での僕の満面の笑みが MBS のドキュメンタリー番組にも出てきます。しかし C4 から上部は食糧が喉を通らず、自分がやせ細っていくのを実感しました。高所の影響でアタマもゆっくりとしか回らず動作が緩慢になっていきました。

5 月 26 日に日中隊員 8 名が頂上に立ち無事に BH まで下山し初登頂は成功しました。その翌日には日中隊員 6 名が C4 まで上がり第 2 次登頂体制に入りました。C4 は広い台地で頂上へ続く斜面までは平らな雪原です。日本隊員は、角谷、ジュンペー、ポールの 3 名。夜明けに温かい飲み物を掻き込みテントを 3 人で出ようとしたところ、終始無口だった角谷さんが、お前達 2 人で行ってこい、俺は調子悪いから待っていると。風は強く 10m 以上ありました。中国隊員もテントを出ていて我々の姿を確認すると先に歩き出しました。ジュンペー、ポールの順でゆっくり歩き出し 10m ほど進んだ時に風音に混じって何かヒトの声が聞こえた気がしました。振り返ると角谷さんが両手を拡げ仁王立ち状態で風に揺れながら、おおと雄叫びの様な声を出しました。慌ててテントまで戻り角谷さんを支えましたが、そのまま崩れ落ちるよう到我々の腕の中に倒れこんでしまいテントに収容。意識は朦朧、呼吸は乱れ、脈拍もうまく測れないほど速くなってきました。無線で BH へ状況を伝えると、高山病・脳浮腫の可能性が高いので、温かくしてからテントを使って簡易そりを作って直ちに下山するようにとの指示がワイさんから出ました。総隊長史占春からも中国隊員に登頂ではなく角谷運搬に加わるように指示が出ています。C3 にいた第 3 次の日中隊員と合流し、ザイル確保しながら慎重に斜面を降りていきました。途中、中国隊員の 1 人が両手を離してポケットの中をゴソゴソし出したので、「手え、離すなあ～」と大阪弁で怒鳴りつけると瞬間に通じました。BC から酸素ポンプを持って駆け上がってきた中国チベット隊員と C3 で合流し、角谷ボートを引き渡してからのことは記憶に残っていません。

帰国の JAL 便の窓から瀬戸内海上空であることに気づき、緑に覆われた島々と四国を見ま

した。樹林に覆われるというのは何と素晴らしいことか、自分は何と美しい土地に生まれたのだらうと感じたことを覚えています。冠松次郎の「溪」を休養日にBHで読んでいたので、よし帰ったら沢登りに行こうと強く思いました。京都に戻ってみると街はすっかり夏模様、四条通にはユーミンのノーサイドという曲が流れていました。「長いリーグ戦、締めくくるキック

はゴールを逸れた、肩を落として土を払った、ゆるやかな冬の日の黄昏が、もう二度と嗅ぐことのない風、深く吸った」  
僕の青春の思い出です。

文中あだ名の方々：齋藤惇生、岩坪五郎、井上治郎、窪田順平、吹田啓一郎、松林公蔵、人見五郎（編集人注）

---

## ナムナニ隊概要

---

2025年はナムナニ隊40周年にあたりますので、隊員の方々からご寄稿いただき、特集としました。

同隊は、京都大学学士山岳会、同志社大学山岳会と中国登山協会との合同登山隊として組織されました。隊の概要は以下の通りです。

隊の名称：日中友好納木那尼峰合同登山隊

### 先遣隊

日 程：1984年4月6日 日本発、6月8日 日本帰国

隊 長：劉大義 副隊長：井上治郎 隊員：佐々木哲男、吹田佳晴、角谷弘司、山田和人、中国側7名

報道隊員：斎藤清明 ほか3名

### 本隊

日 程：1985年4月5日 日本発、5月26日 第一次登頂、7月9日 日本帰国

総 隊 長：史占春 副総隊長：齋藤惇生、劉大義 登山隊長：平林克敏 秘書長：佐々木哲男

隊 員：和田豊司、吹田佳晴、松林公蔵（医師）、角谷弘司、窪田順平、伊藤宏範、吹田啓一郎、山田和人、中山和俊、岩田喬 ほか中国側12名（うち予備隊員2名）

学術隊員：岩坪五郎、西山孝、玉村和彦、井上治郎、宮崎貴文 ほか中国側5名、報道班：日本側6名、中国側7名、中国側 医師1名、通信員1名、ほか19名（ドライバー、炊事員、通訳）

報 告 書：「ナムナニ」日中友好納木那尼峰合同登山隊編、1986年、毎日新聞社

編集人 横山宏太郎

# 北大・京大交流会

## 北海道大学山岳部・山の会との交流事業について

幸島司郎

### 交流事業の趣旨

近年、登山装備や各種サービスの急速な発展により、組織に属さずとも誰でも容易に山登りを楽しめるようになりました。その結果、大学山岳部や山岳会に所属する若者の数は減少傾向にあります。また海外遠征も容易になり、極端な話、十分な資金とある程度の体力さえあれば誰でもエベレストに登頂できる時代ともなりました。そのため、ヒマラヤ高峰の初登頂を目的に設立された AACK のような組織の目標や必要性も薄れつつあります。

このような状況の中、AACK や京大山岳部が抱える数々の課題：遠征対象にふさわしい山の減少、会員数の減少や高齢化による活動低下、さらには管理する山小屋運営の困難など、は他大学の山岳部や山岳会も共通して抱えているものです。したがって、こうした課題を乗り越えるためには、組織を超えた交流を深め、協力して解決策を模索することが重要であると考えています。例えば、部員が少ない、あるいは経験不足で実現できない山行や遠征も、組織間の協力によって実現できる可能性が広がります。また、会員数の減少や高齢化で管理・運営が難しくなった山小屋も、他の組織のメンバーによる利用や協力によって維持が可能となるかもしれません。

### 北海道大学山岳部・山の会との組織的交流事業

こうした考えのもと、まずは AACK と同様に長い歴史を持ち、会員間の個人的な交流も盛んな北海道大学山岳部・山の会 (AACH) との組織的交流を深める事業を進めることとなりました。

まず手始めに、2023 年の総会後の講演会で、北大山の会の会長・渡辺興亜氏により、北大山岳部および北大山の会の現状や課題についてご

講演いただきました。北大と京大の山岳部が抱える共通の課題を再確認させられるとともに、「北大山岳館」を通じた現役部員や OB の活発な交流活動など、今後の AACK の活動にとって示唆に富むお話でした。その中で、「北大山岳部設立 100 周年事業の一部として交流事業を推進しよう」との提案もなされました。

交流事業の第一歩として開催されたのが、7 月に笹ヶ峰ヒュッテで開催された北大山岳部との OB 交流会です。この交流会は、笹ヶ峰会会長で本会会員でもある横山コータローさんの呼びかけによって実現したもので、笹ヶ峰会と本会の共催事業です。ここでは OB 同士の交流を深めるとともに、今後の交流の可能性について自由に意見交換がなされました。また、多くの北大山岳部 OB に笹ヶ峰ヒュッテを知ってもらうことで、ヒュッテ利用の拡大や運営への協力につながることも期待されています。

その成果として、次回の交流会は北大山岳部が管理するヘルベチアヒュッテや空沼小屋で、できれば現役山岳部員など若い会員同士の交流を深められる形で開催することが決まり、現在企画が進行中です。

### 他組織との連携拡大

また北大山岳部との交流に加えて、京都府立洛北高校と鴨沂高校の山岳部 OB 会である北山の会との交流も進められています。2 年前に本会副会長・榊原ルンベさんを通じて、今西錦司氏や西堀栄三郎氏らによって建てられた「北山荘」の管理運営に対する協力を要請されたことがきっかけとなりました。ちなみに、北山の会の現会長は、北大山の会元会長である洛北高校山岳部 OB の小泉章夫氏です。北山荘は左京区雲ヶ畑の奥、魚谷山の麓にある小さな山小屋で、林道終点から 30 - 40 分歩けば着ける便利な場所

にあり、囲炉裏もあって快適に過ごせます。新人歓迎会など、現役部員の利用も期待できます。

## 今後の展望

今後も各山岳会・山岳部との交流を深め、組織の枠を越えた協力体制を築くことで、組織が抱える課題の解決や活動の活性化を目指してい



写真1：雲ヶ畑にひっそりとたたずむ北山荘。旧制京都一中山岳部時代からOBたちの手で受け継がれてきた（2023年11月）

きます。また、現在AACKと笹ヶ峰会会員有志によって京都の松ヶ崎に整備中である宿泊可能な交流施設「京都大学山岳部クラブハウス(仮称)」の運営にも協力する予定です。この施設はAACK会員や山岳部員、他山岳会会員などの交流拠点となることを目的としています。皆様にも、ぜひこれらの事業に積極的なご参加とご協力をお願い申し上げます。



写真2：囲炉裏を囲んで談笑すると、雪山讃歌「煙い小屋でも黄金の御殿」を彷彿させる（2023年11月）

---

## 飲んで食べ、歌って笑った北大・京大交流会

榎原雅晴

---

「吹雪の尾根も風やみて 春の日ざしの訪れに〜」（北大山岳部歌・山の四季）、「パンの神様 酒が好き〜」（京大山岳部歌・パンの神様）

笹ヶ峰ヒュッテで7月29日に開かれた北海道大学山の会（AACH）と京都大学学士山岳会（AACK）・笹ヶ峰会の合同交流会には北大7人、京大10人が参加し、飲んで食べ、歌って笑い、大いに盛り上がった。極地研究家の加納一郎（1898-1977）が旧制京都一中山岳部から北海道帝大に進んだように、京大と北大には脈々と続く人的交流があった。「雄大な北海道の山々に挑む開拓者精神にあこがれた」「ヒマラヤ登山や探検で活躍する京大に瞠目していた」。お互いが一目置く存在でもあった。そんな畏友を遠方から迎え、酌み交わす美酒はことのほかうまかった。

### ■貴重な交流が脈々と続く

交流会を呼びかけた幸島司郎・AACK会長は「僕は学生のころから北海道が好きで、ヘル

ベチアヒュッテに何か月も住み着いた。そこで雪氷に生きる虫を調べ、渡辺興亜さん（現AACH会長）と知り合ってヒマラヤに連れて行ってもらった」と振り返る。その後の研究にとっても、登山人生にとっても、北大人脈とはどんなに貴重な出会いだったか。それだけに「山岳部長のとき、北海道に行く現役部員に『北大の部室にも寄ってこいよ』と声をかけても誰も行かない。もったいない」と感じていた。かつてのようにフランクな交流の復活を願って投じた一石だった。

1957年の第1次南極観測以来、多くの観測隊員を送り込んだ両山岳部だけに参加者には横山宏太郎、山岸久雄、斎藤清明（AACK）、吉田勝、白石和行（AACH）ら南極OBの姿が目立った。

元国立極地研究所長の白石さんは「恵迪寮にあこがれて北大に進み、浜名と同室になり、いろいろと悪さをした。1972年からの南極越冬では宏太郎さんにお世話になった。そこでの方

ながりがヒマラヤでも続いた」。横山さんは「南極から帰り、札幌の北大低温研で観測データを整理するため、彼の下宿に居候していた。そのうちに、ぞろぞろと人間関係が広がった。北大と京大とは心情的に近いものがあり、彼らにぜひ笹ヶ峰に来てほしかった」と旧友を歓迎した。一方で「北大農学部を卒業し、京大大学院を受けようと宏太郎の下宿に転がり込んだ。しかし酒盛りの連続で、勉強なんかできるわけがない。見事に試験は落ちた」と、浜名純さんが＜不都合な真実＞を暴露する一幕も。

### ■抱腹絶倒のエピソードも

酒が入るにつれ、抱腹絶倒のエピソードが飛び出した。

「冬の北アルプスを縦走していると、先方からいかにも風体の怪しいパーティが近づいてきた。継ぎはぎだらけのヤッケ、月光仮面みたいなサングラス。ふと予感がして『北大?』と声をかけると、向こうからも『京大?』と返って来た。お互い同じオーラがあった」(AACK・榊原雅晴)。「僕もカトマンズでAACKの上田豊さんや井上治郎さんに会ったとき、同じニオイを感じた。どんどんマイノリティになっていくこの感覚を若い連中に伝えていくことも我々の仕事ではないか」(AACH・八木欣平)

「北大、名古屋大(樋口敬二研究室)を経て滋賀県琵琶湖研究所で仕事をしていたときのこと。広報誌に寄せてもらった岩坪五郎さんの原稿を、所長の吉良竜夫さんが真っ赤になるまで手直ししてしまった。恐る恐る五郎さんに見せると、『ぜひその原稿を記念に取っておきたい』とおっしゃってくれ、ほっとした」(AACH・伏見硯二)。「それと同じことを、吉良さんは大興安嶺で、今西錦司さんにやられた。それが今

西流の教育だったんやね」(AACK・斎藤清明)

京都府立洛北高山岳部から北大に進んだ小泉章夫さんは現在、「北山の会」(京都一中・洛北高校・鴨沂高校山岳部OBの会)の会長でもある。「笹ヶ峰は洛北高山岳部がスキー合宿をしていた懐かしい場所。1980年ごろ、北海道からOBで参加し、全く雪がなく困った思い出がある。同じころ幸島さんが札幌に来て、私たちが『お化け屋敷、と呼ぶ安下宿に転がり込んできた。その幸島さんと、一昨年、北山の会総会で約50年ぶりに再会できた』と奇縁を喜ぶ。そして「北大と京大は重層的なつながりがある。今後は若者の交流を図りたい」と、ヘルベチアヒュッテ、空沼小屋などでの新たな出会いに期待している。

### ■正調「山の四季」を歌う

前京大山岳部長の竹田晋也さんから「笹ヶ峰で焚火を囲み、山の歌を歌うのが京大山岳部の伝統だった。北大の部歌もよく歌ったが、僕たちが先輩から教わった『山の四季』が本当に正しいのか、ずっと疑問だった。せっかくの機会だから正調を聞かせてほしい」とリクエスト。笹ヶ峰ヒュッテの歌集にも載っており、さっそく合唱が始まったが、「こんなにテンポが速かったっけ?」「京大の歌い方が、全部4拍子になってしまってる」と指導が入る。さらに「雪山賛歌」「山の大神」「ぼくらのふるさと」……と、深夜までの大合唱となった。

酩酊が深まるに従い、「最近の若い連中はあまり山の歌を歌わないよなあ」「だって歌声喫茶が寮歌だからねえ」。なんだかボヤキまで似てくる双方のOB。北海道と京都の距離だけでなく、世代間の距離を縮める必要性をも悟った一夜だった。



笹ヶ峰ヒュッテ前に集合した北大、京大のOBたち



深夜まで山の歌を合唱する参加者ら

## 事務局だより

初冬の晴れ渡った日、幸島会長の陣頭指揮の下、松ヶ崎の左京区役所近くにある誰も住まなくなった一軒家への引越し作業を行ないました。ここは、某 AACK 会員の計らいで山岳部関係者が使わせていただけることになっているそうです。予め中川コタレ会員の尽力で人が住めるように改修も完了しており、この日は幸島会長の計らいで樋口明生会員の半年前にご逝去されたご夫人が使っておられた家財道具や調度品一式をこの一軒家に運び込むこととしていました。朝から、枚方の故人のお宅でご息女の樋口敦子さんともども洗濯機、電子レンジ、ベッド、布団、食器、台所用品、それにネパールゆかりの品々などの梱包作業を行い、腰をいたわりながら竹田前山岳部長が操る 2 トントラックに積み込み、日没の迫る夕刻に松ヶ崎の一軒家にたどり着きました。そこでは榊原副会長とご夫人が待ち受けており、途中から高井現山岳部長も駆けつけ、皆で開梱と整理作業を行ないました。道半ばで作業を諦めて今後の宿題とし、皆でおでんと焼肉を囲みビールで 1 日の労をねぎらいました。

今後、松ヶ崎の一軒家は簡易宿泊所、集会所、書籍収容庫等として、利用させていただくこととなります。

## 会員動向

### 訃報

宮坂 実 2025 年 10 月 17 日逝去

平沢秀夫 2026 年 1 月 11 日逝去

## 編集後記

2025 年は、春にナムナニ、秋はマサコンの登山隊がそれぞれ初登頂に成功した 1985 年から 40 年になるので、特集号を企画しました。発行は 2026 年になりましたが、まずはナムナニ 40 周年特集をお届けします。同志社大学山岳会の和田豊司さんはじめ隊の皆さんからご寄稿いただき、ありがとうございました。

和田さんは日本山岳会東海支部の「猿投(さなげ)の森づくりの会」の代表を務めておられます。2021 年秋には笹ヶ峰ヒュッテの周りの樹木の伐採剪定を、和田さんはじめ同会の方々に実施していただきました。たいへんありがとうございました。

猛暑の夏、短い秋、そして雪の季節になりました。おりしも「今冬最強・居座り寒波」のただなかです(1 月 22 日)。この低温傾向はほぼ 2 週間続きそうな予報です。毎日のように除雪をしながら、こんな時に山に入っていたらどんな様子だろうかと思いました。そこで思い出したのが、50 年以上も前のことですが、1968 年から 69 年にかけての、「剣大量遭難」の元となった悪天候です。京大山岳部の黒部別山南尾根から剣岳という計画のパーティーも、他パーティーの影響もあって、剣頂上付近で 10 日間の停滞を余儀なくされました(注)。

近年、気象の極端化が言われます。山で、災害級の悪天候に遭遇する可能性が高くなるかもしれないと心配しています。

注：記録は京大山岳部報告 15 号。関連記事は渡辺良男さんによる「剣岳大量遭難救出劇」Newsletter No.85 (2018 年 5 月) があります。

原稿送り先：横山宏太郎

発行日 2026 年 1 月 31 日  
発行者 京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎  
発行所 〒606-8501  
京都市左京区吉田本町  
京都大学総合博物館 高井正成 気付  
編集人 横山宏太郎  
製作 京都市北区小山西花池町 1-8  
株土倉事務所